Okinawa Prefectural University of Arts

組踊「万歳敵討」の敬語表現

西岡　敏

0．はじめに

組踊は、「琉球語」で生産された文芸の一つであり（加治工真市1998:206)、過去において書き残された数十の台本等を、言語学・方言学などの観点により綿密に分析することは、琉球列島の言語の歴史と変遷を捉えるうえでも重要である。本稿では、そのごく一部についてではあるけれども、組踊「万歳敵討」で用いられている敬語表現について考察してみたい。

組踊「万歳敵討」は、田里朝直（1703～1773）の作として知られている。京太郎（チョンダラー）に身を窶した謝名の子と慶運の兄弟が、父の仇敵である高平良御鎖が浜下りをしている小湾村に赴き、兄弟は、高平良御鎖の前で京太郎の踊りを舞い、その隙を見計らって討ち果たすという物語である。能「放下僧」の翻案で、京太郎という旅芸人の姿を借り、仇討ちを主題に置きながらも、京太郎の「芸の面白さをみせるという趣向を取っている」（矢野輝雄2001:34)。本稿におけるテキストの引用は、伊波普猷1974[1929]「校註琉球戯曲集」『伊波普猷全集第３巻』所収の「万歳敵討」を典拠とした。

1．組踊「万歳敵討」における人間関係

組踊「万歳敵討」に登場する人物のうち、待遇表現の考察に関係する者を以下に掲げる。括弧内にその人物の概略を示した。

①大謝名のひやのグループ

大謝名のひや（謝名の子・慶運の兄弟の父、高平良御鎖に闇討で殺された）

謝名の子（大謝名のひやの嫡子、慶運の兄）

慶運（謝名の子の弟、修行僧となっている）

母（謝名の子・慶運の母）

②高平良御鎖のグループ

高平良御鎖（謝名の子・慶運兄弟の仇敵）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

高平良御鎖の妻
高平良御鎖の娘たち（子供等）
高平良御鎖の供たち
③その他の人
通行人（謝名の子に高平良御鎖の浜下りの場所を語る）

2．組踊「万歳敵討」における丁寧語

組踊語では、本土語の「はべり」に対応する形「やべり」が丁寧語の働きをする。現代首里方言の「～ビーン」に相当する形である。丁寧語は、誰についての話題をしているかには無関係で、もっぱら聞き手に対する丁寧さを表わすものである。他の組踊には数多く出てくるこの「やべり」であるが、組踊「万歳敵討」にはほとんど出てこない。しかも、そのわずかに出る用例も「拝み留めやべて」(ウゥガントゥミヤビティ) という目上の人に対する「かしこまりました」という決まりきった応答語のみに見られる（組踊語のカナ表記は西岡敏・仲原穣2000によるものを使用した)。

(01) 拝留めやべて。(高平良御鎖の供→高平良御鎖) p. 309上段
(02) 拝留めやべて。(高平良御鎖の供→高平良御鎖) p. 309下段
(03) 拝留めやべて。(高平良御鎖の供→高平良御鎖の子) p. 316下段
(04) 拝留めやべて。(謝名の子→高平良御鎖の供) p. 316下段

以上が組踊「万歳敵討」において丁寧語「やべり」を含む動詞の全用例である。３番目の例（03）は、年齢でこそ「供」よりは「子」のほうが下であろうが、主君の「子」であるので、「高平良御鎖の子」が目上、「高平良御鎖の供」は目下と見ることができる。また、最後の例（04）「謝名の子→高平良御鎖の供」に用いられた例は、謝名の子が社会的に低く見なされている「京太郎（チョンダラー)」に身を窶した姿で応答していることにも留意しておきたい。例は少ないものの、いずれも目下の話し手から目上の聞き手へと用いられているもので、目上から目下というものはない。「やべり」の使用は、目下から目上へと不可逆的・一方向的に起こっている。

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

3．組踊「万歳敵討」における尊敬語使用

組踊語では、尊敬語の一般的な形（一般形）として、「めしおわる」「めしあり」、「～れる」（受身・可能と同形）といった語形が存在する。「めしおわる【召し御座る】」「めしあり【召し有り】」は、いわゆる「補充法」で、互いに補いながら一つの活用体系をなしている。組踊の「おわる【御座る】」については、すでに尊敬の度合いを失って尊敬語とは言えなくなっている（5節で後述）。また、一般的な形以外に、その動詞特別の敬語の形（特定形）がある。「食べる」「飲む」→「めしあがる」といった類のものである。組踊語では「いみおわる【いみ御座る】」「いみあり【いみ有り】」（いらっしゃる）、「たびおわる【給び御座る】」（くださる）などと言ったものがある。

尊敬語とは、話し手による、尊敬に値する話題となる人物への敬語であり、その文の主語を高めるということを特徴とする（菊地康人1994:93）。なお、沖縄語では、広く自らの身内を高めてもかまわない「身内敬語」が浸透している（西岡敏2003:100-101）。組踊「万歳敵討」での用例は以下の通りである。本稿では（話し手［話題の人物（＝主語）］）という形で表記する。

(05) 語てたばうれ。（慶運［謝名の子］）p. 304下段

(06) ゆるちたばうれ。（慶運［謝名の子］）p. 306下段

(07) 急ぎ引合ち賜れてやり（謝名の子と慶運［末吉の御神］）p. 312上段

(08) 御通り召しやうれ。（謝名の子〈「京太郎」の身〉［通行人］）p. 313上段

(09) 御目かけため（謝名の子と慶運〈「京太郎」の身＝演者〉［高平良御鎖の一行（観客）］）p. 318下段

(10) 能くどほこられら。（謝名の子［父］）p. 320上段

(11) ほこり召しやいら。（謝名の子と慶運［父］）p. 32下段

以上が組踊「万歳敵討」において尊敬語を含む動詞の全用例である。

(05) と (06) の「たばうれ」（タボリ）は「（～して）ください」に当たる命令形で、いずれも「弟」から「兄」に用いられており、いわゆる「身内敬語」である。これとは逆に「兄」（謝名の子）から「弟」（慶運）に尊敬語が用いられた例はない。すなわち、「弟から兄へ」、不可逆的・一方向的であ

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

る。兄から弟へは次の（12）（13）のような命令形が用いられている。いずれも「～たばうれ」の形ではない。

（12）だによ聞きとめれ。（謝名の子［慶運］）p. 305下段　しかと聞きとめよ。

（13）思ひきはめれよ。（謝名の子［慶運］）p. 306下段　思いきわめろよ。

（07）は口説の中の歌詞なので、直接、登場人物によって唱えられるものではないが、登場人物の気持ちになりかわって、地謡が唱するものである。「末吉の御神」が敵とすぐに引き合わせて「くださる」ことを願立てするといった内容であり、主語は「末吉の御神」であるので、尊敬語の使用として通常のものである。

（08）においても一方向的な関係を留意しておきたい。（08）では、謝名の子が通行人に対して「（これからまつすぐ）御通り召しやうれ」と尊敬語の命令形を使用している。これに対して、通行人はこの謝名の子のその回答を得る前に次の（14）のように尋ねている。

（14）道知らぬあもの、

よすて呉れよ。（通行人［謝名の子］）p. 311　教えてくれよ。

通行人は、おそらく初対面であるはずの謝名の子に対して尊敬語を使用していない。ここでは、謝名の子が社会的に低く見なされている「京太郎（チョンダラー）」に身を窶した姿でいることも関係しているものと思われる。

（09）も「さいんする節」の中の歌詞で、登場人物によって唱えられるものではなく、また、内容的にも未詳の部分が多くあるが、謝名の子と慶運の兄弟の京太郎に身を窶した姿、演者としての立場が反映されていることがうかがえる。「御目かけため」（ウミカキタミ？）はここでは尊敬語「御覧になったか？」の意味で、観客（高平良御鎖一行）を主語と解釈したが、兄弟を主語、高平良御鎖一行を補語として、「お見せした」という謙譲語の解釈もできる。

（10）（11）は、尊敬語でも、一方は「～れる」（～リル）の形、他方は「～めしやいる」（～ミシェール）の形で、身内である［父］を高めている。同じ対象（父）を高めていることもあり、両形のいずれかが選択されることについては音数律以上の理由を見出しにくい。他の組踊では両者の間に使い分

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

けがありそうな例も見受けられる。組踊「忠士身替の巻」より次の例（15）（16）を挙げる。

（15）殺されよめしやうち、（亀千代［玉村按司］）p. 73下段

（16）討死よされて（亀千代［里川のひや（父）］）p. 74上段

（15）（16）では、自らの主君の按司に対しては「～めしやうち」を使用しているが、自らの父に対しては「～れて」を使用している。「～めしやうち」が「～れて」よりも高い待遇を表示している例である。「父」に対してはさらに高い待遇の「めしやうち」ないしは「めしやいる」を用いてよいが、自らの主君の「按司」に対してはより低い待遇の「～れる」は使用しにくかったのかもしれない。

4．組踊「万歳敵討」における謙譲語使用

組踊語の謙譲語では、一般的な形（一般形）として、「御（ウ／ミ）～する」といった形がある。また、尊敬語と同じく、一般的な形以外に、その動詞特別の敬語の形（特定形）がある（「言う」→「申し上げる」といった類のもの）。組踊語では「おみのける（ウンニュキユン）」（申し上げる）、「拝み留める（ウゥガントゥミユン）」（かしこまる）、「拝む（ウゥガミュン）」（拝見する）、「よしれる（ユシリユン）」（伺う）などと言ったものがある。

謙譲語とは、話し手による、尊敬に値する話題となる人物への敬語であり（ここまでは尊敬語と同じ）、その文の補語を高めるということを特徴とする（菊地1994:210）。すなわち、補語を高め、主語を低く位置付ける。本稿では（話し手［主語→補語］）という形で表記する。まず、既出の「拝留めやべて」という応答の語を謙譲語としても再掲しておく（特定形の一つと見なせる）。

（01）拝留めやべて。（高平良御鎖の供［左同人→高平良御鎖］）p. 309上段

（02）拝留めやべて。（高平良御鎖の供［左同人→高平良御鎖］）p. 309下段

（03）拝留めやべて。（高平良御鎖の供［左同人→高平良御鎖の子］）p. 316下段

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(04) 拝留めやべて。(謝名の子［左同人→高平良御鎖の供］)p. 316下段

それ以外の謙譲語の例は以下の通り。

(17) 母拝みぼしやあても（慶運［左同人→母］）p. 304上段

(18) 御見舞もすらぬ。(慶運［左同人→母］）p. 304下段

(19) 母親も拝がで（謝名の子と慶運［左同人→母］）p. 311下段

(20) 御目覚ましがらめかに。(謝名の子と慶運〈京太郎〉［左同人→高平良御鎖一行］)

(21) 御目覚ましがらめけよ。(高平良御鎖の供［謝名の子と慶運〈京太郎〉→高平良御鎖一行］

以上が組踊「万歳敵討」において謙譲語を含む動詞の全用例である。

話し手と行為者（＝主語）が同一人物である場合が多い（「左同人」としてある)。そんななか、(21) は、話し手（供）が自分より目下の聞き手（京太郎）に対して、その目下（京太郎）がさらに目上（高平良御鎖一行）に行為するよう促すときに、謙譲語が用いられている例である。

(18) は「御～する」といった謙譲語一般形の例である（お見舞いする)。補語は身内の「母」である。

(17) (19) の「拝む」は、謙譲語特定形の一例である（お会いする)。補語はこちらも身内の「母」である。現代首里方言では「御～拝む」という形が、「御～する」という形と並んで、謙譲語一般形の地位を占めている。

(20) (21) の「御～がらめく（ガラミチュン)」は、現代首里方言では用いられない謙譲語の例である（お目を覚まさせ申し上げる、お目にかける)。これについては、二つの考え方を軸に、以下に少し詳しく述べてみたい。

まず一つ目の考え方である。「ガラミチュン」は『沖縄語辞典』に次のように「まれな語」としての記述がある。「garami=cuN ①（他 =kaN, =ci）〔文〕奉仕する。勤める。まれな語。ʔutumu ～. お供申し上げる。『がらめき勤め営む事也（混効験集)』」（国立国語研究所2001［1963］:189)。

また、「ガラミチュン」は、伊波普猷（1992［1938］）の『琉球戯曲辞典』に次のように説明されている。

がらめきゆん garamichun 仕奉る。勤む。混効験集「がらめき、勤め営む事也」がらめか（将然)、がらめき（連用)、がらめきゆん（終止)、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

がらめきゆる（連体）、がらめけ（已然命令）と活用する。老人老女「のうがながらめが(ママ)んで願てをやべる」 城中番のさくりの番うたひ「油断しめさしやうんな、御門御鎖の御番、強く細く思ひつめて、御番がらめかさしややうれえ、さあらい」 忠士身替「按司加那志御奉公、がらめきもすらぬ、あたらよしれやり、御褒美すでよすや、云々」 やらざもり城の碑文「くにゞゝのあんじべみばんのさとぬしべけらへあくかべかみしもぢはなれそろてがらめちへぐすくつみつけてみおやしちやれば云々」

組踊の用例の他に、すでに「やらざもり城の碑文」（1554年）の段階で「がらめちへ」の語が見えることは注目すべきことと言えよう。ただし、伊波も「がらめきゆん」の由来などについては何も述べていない。

「がらめきゆん」、すなわち「がらめく」という語は、おそらく「がら＋めく」と分析できる。この「～めく」は現代首里方言の「～ミチュン」と関連付けられる。「～ミチュン」という言い方について、『沖縄語辞典』では次のように説明されている。「-mi=cuN（接尾 =kaN, =ci）擬声語・擬態語について、…という音を出す、…という状態になるなどの意を表わす。…めく。'jutamicuN（ゆらめく）, dakumicuN（どきどきする、ときめく）など」（国立国語研究所［編］2001［1963］:370）。 また、「～めかす」に当たる形もある。「-mika=sjuN（接尾 =saN, =ci）擬声語・擬態語につき、…という、…という音を立てるの意を表わす。dusamikasjuN（どしんという音を立てる）、'jutamikasjuN（ゆらゆらさせる）、hijamikasjuN（えいっと言う）など」（国立国語研究所［編］2001［1963］:378）。

この「～めく」「～めかす」という言い方は、すでにオモロの時代において存在していた。たとえば、次のような例である（外間守善2000より引用。訳は同書と沖縄古語大辞典編集委員会1995を参考にし、筆者が各行と対応させた）。

第13巻780

一	まはへすづなりぎや	真南風鈴鳴り（船）が
	まはい　さらめけば	真南風がさらさらと吹けば
	たう　なばん	（唐、南蛮の

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

かまへ　つで　みおやせ　　貢物を積んで国王に差し上げよ）
又　おゑちへすづなりぎや　　追手鈴鳴り（船）が
おゑちへ　さらめけば　　追手風がさらさらと吹けば

第1巻39
一　きこゑ大ぎみぎや　　名高い聞得大君が
とよむせだかこが　　有名な霊力の高い者が
いつこしま　とよで　　（威勢の良いシマは鳴り轟いて）
又　おぼつ世の　まだかさ　　天上世界の真に高いことだ
かぐら世の　まだかさ　　神座世界の真に高いことだ
又　おぼつ　よためかちゑ　　天上世界を揺り動かして
てにち　よためかちゑ　　天地を揺り動かして
（以下略）　　（以下略）

いずれも、畳語的な擬態語の要素半分に、「～めく」（さらめけば）、「～めかす」（よためかちゑ）が付いている。これらの例から察するに、「～めく」「～めかす」の前部要素は、オモロの時代から擬音語ないしは擬態語の一部であったと思われる（「さらさら」＝風が吹く音ないしは様子、「よたよた」＝揺り動く様子）。とすると、「やらざもり城の碑文」（1554年）にすでに現われる「がらめく」の「がら」もかなり高い可能性で擬音語ないしは擬態語であったと考えられよう。そこで方言辞典をひもといて見ると、次のような擬態語に行き当たる。

がらがら　［副］　急ぐさま。「ガラガラ行かないと間に合わない」山形県南部・会津。（東條操1951:205『全国方言辞典』）

この「がらがら」の「がら」、すなわち、「急ぐさま」の要素に「～めく」と考えることはできないであろうか。すなわち、「急ぐ状態になる」ということから、何かにいそしむ、優先的に行なうなどの意味を持ちえたと考えるのである。東北地方と沖縄地方の語彙を安易につなげることは慎まなければならないであろうが、「がらめく」の「勤め営む」という組踊での意味と「がらがら」の「急ぐさま」という東北地方（山形県南部・会津）での意味とのつながりを可能性として指摘しておきたいのである。また、山口県豊浦郡に

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

おける動詞「がる」の説明「過度に熱心にする。『仕事をガル』」（東條1951:209）も関係ないだろうかと気になるところである。

上の考え方のほかに、次のもう一つの考え方を挙げておきたい。それは石垣方言の「ガラマーシゥン」「ガラマクン」という語と組踊語の「ガラミチュン」を結びつける考え方である（宮城信勇2003:254）。宮城信勇氏の『石垣方言辞典』には、「ガラマーシゥン」に「牛耳る」、「ガラマクン」に「牛耳る、取り仕切る、采配を振るう」という訳が付いており、「ガラマクン」の項目に問題となっている「がらめき」との関係が指摘されている。ここでは「ガラ＋マーシゥン」、すなわち「ガラ」回す、あるいは、「ガラ＋マクン」、すなわち「ガラ」巻くと解釈できる。「ガラ」は、同辞典によれば「①簪（かんざし）の根元の方の丸く皿のような形をした部分。②形がそれに似ている物」（宮城2003:249）を指すという。すると、「ガラ＋マーシゥン」とは、もともと「簪の皿を回す」こと、「ガラ＋マクン」とは「簪の皿を巻く」ことを意味していたのではないかと考えられる。髪を簪できっちりと整えるように、物事を牛耳る、取り仕切る、采配を振るう、という考え方はいかにも魅力的であり、それが沖縄の「勤め営む事」（混効験集）の「がらめく（ガラミチュン）」と関係していると考えることはごく自然なことのようにも感じられる。

しかしながら、ここで語形と意味の対応の問題が残ってしまう。沖縄での語形は「ガラミチュン」あるいは「ガラミカシュン」（沖縄古語大辞典編集委員会1995:218）で「～ミチュン」（～めく）「～ミカシュン」（～めかす）であり、石垣方言の「～マーシュン」（～回す）、「～マクン」（～巻く）とは語形が異なっている。この差異をどのように埋めるかが一つのポイントである。もう一つのポイントは、「牛耳る」「取り仕切る」といった意味が謙譲語の意味とどのようにつながるかである。確かに石垣方言の「ガラマーシュン」「ガラマクン」と組踊語の「ガラミチュン」は何かに対して一所懸命に取り組むということで共通しているように思うが、前者は「牛耳る」という自分中心的な行為、後者は「奉仕する」という他人中心的な行為を意味することを考えると、その差がまだ少しあるようにも思える。そうとはいうものの、組踊語の「がらめく（ガラミチュン）」が、同じ琉球諸方言の一つである石

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

垣方言の「ガラマーシゥン」「ガラマクン」と関係づけられるのはたいへん魅力的な考え方であり、他の方言に似たような語例があるのか期待されるところである。

5.「万歳敵討」における敬度漸減の「おわる」(～ヨール)

琉球方言における「おわる」の諸相については、仲宗根政善〔著〕『琉球方言の研究』において、さまざまな角度から分析がなされている。組踊の「おわる」についても分析されており(仲宗根1987:230-231)、次の二つの用法があるとされている。いずれも『おもろさうし』以降に「敬意の度を減じて」(仲宗根1987:231)しまったために出来た用法である。

(イ) 自分の動作に用いられた例:

出様ちやるものや〈まかりいでたる者は〉

(ロ) 目下の者に用いられた例:

(あまおへから供へ) 酒よ　酒よ　出しやうれ　出しやうれ(護佐丸敵討)

(外間の子から供へ) 宿主の　名字　尋ねやりきやうれ(忠士身替の巻)

組踊「万歳敵討」から「～おわる」の全用例を仲宗根(1987:231)の分類に原則したがって以下に挙げる。(ロ)について、自動詞は(話し手[聞き手])という形で表すが、他動詞は行為を受ける話題の人物のことも考慮し、(話し手[聞き手→話題の人物])という形で表わすことにする。これは他の組踊の用例で、「お～する」に当たる謙譲語にも見えるような「～おわる」の用例を見出せるからである。(イ)の用例は過去連体形(組踊のすべての用例で過去連体形)、(ロ)の用例は「万歳敵討」ではすべて命令形である(他の組踊では接続形の用例もある)。

(イ) 自分の動作に用いられた例

(22) 出様ちやる者や(高平良御鎖) p. 308下段

(22)の例は、按司・大主クラスの登場人物が、舞台に出る場面(出羽)において用いる決まり文句である。

(ロ) 目下の者に用いられた例

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

(23) 宿借ゆんてやり言やうれ。(高平良御鎖［高平良御鎖の供→小湾村の人］) p. 309上段

(24) たうたう村んかい行きやうれ。(高平良御鎖の供［謝名の子・慶運〈京太郎〉］p. 316上段

(25) 呼で踊らしやうれ。(高平良御鎖の子供［高平良御鎖の供→謝名の子・慶運〈京太郎〉］) p. 316下段

(26) つめて踊らしやうれ。(高平良御鎖の子供［高平良御鎖の供→謝名の子・　慶運〈京太郎〉］) p. 318上段

(24) は自動詞「行く」の例。これに対し、(23)「言う」(25)(26)「踊らせる」は、行為を受ける話題の人物を特定できる。ただし、謙譲語のように、その話題の人物（ここでは、「小湾村の人」と「謝名の子と慶運（京太郎)」であるが）が高められているとは言えない。

引用文献

・伊波普猷　1974[1929]　『伊波普猷全集第３巻』(服部四郎・仲宗根政善・外間守善［編］)　平凡社

・伊波普猷　1992[1938]　『琉球戯曲辞典』榕樹社

・沖縄古語大辞典編集委員会［編］　1995　『沖縄古語大辞典』　角川書店

・加治工真市　1998　「琉球方言への誘い――琉球方言の地域性――」『南島文化への誘い』(沖縄国際大学公開講座７)　沖縄国際大学公開講座委員会編　那覇出版社

・菊地康人　1994　『敬語』角川書店

・国立国語研究所［編］　2001[1963]　『沖縄語辞典』財務省印刷局

・東條操［編］　1951　『全国方言辞典』東京堂出版

・仲宗根政善　1987　『琉球方言の研究』新泉社

・西岡敏・仲原穣　2000　『沖縄語の入門――たのしいウチナーグチ』伊狩典子・中島由美［協力］　白水社

・西岡敏　2003　「沖縄語首里方言の敬語付き動詞」『琉球の方言』27　法政大学沖縄文化研究所

・外間守善　2000　『おもろさうし（上・下)』岩波文庫

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural University of Arts

・宮城信勇　2003　『石垣方言辞典』加治工真市［監修］　沖縄タイムス社
・矢野輝雄　2001　『組踊への招待』琉球新報社

謝 辞

琉球方言研究において、加治工真市先生からいただいた学恩は計り知れないものがあります。『沖縄古語大辞典』『石垣方言辞典』を通じて、先生の緻密なお仕事に接することができましたことを、たいへん有難く、幸せに存じます。また、2002年度の「民族芸術文化学研究Ａ」の組踊「忠士身替の巻」を読む講義では、琉球文学を言語学的な視点で綿密に読む姿勢をお教えくださいました。先生の言語学・方言学は、人間の温かみをいつも感じさせてくださるのです。これからも、どうかご指導くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

（にしおか　さとし・沖縄県立芸術大学大学院博士課程）

NII-Electronic Library Service